
鈍感王子

蒼咲 秀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鈍感王子

【Nコード】

N7415B

【作者名】

蒼咲 秀

【あらすじ】

意地っ張りで素直になれない姫が、世界で一番の鈍感王子を落とすためには、どうしたらいいでしょう？

ブローグ（前書き）

未熟者ではありますが、全力で頑張りますので、長く広い目で見てください（欲張り！）嬉しい限りです！！

プロローグ

私が小さい頃から大好きだった物語は、

ラストシーンで、

眠っていたお姫様は王子様のキスで
目を覚ます。

なんて素敵な終わり方だが、

私の王子様は当分、

私の元には来ないでしょう。

私がお姫様みたいに美女じゃないから？

第1作戦（前書き）

未熟者故、2ページ目が作れませんでした…

1ページにしては長くなりましたが、

最後まで読んで頂けると嬉しい限りでございます…

第1作戦

ガラガラ…

朝、あたしの部屋の窓が開く。

別にいつもと同じ。

「さーよ！起きろ、遅刻するぞ！」

いつもと同じ起こし方。

「今日も遅刻なんて絶対嫌だからな。」

もう…

「さーよ!」

「うるさい!」

あっ
…

つい口に出しちゃった。

「お前なあ、わざわざ起こしてやった人に向かって、
「だから、聞こえてるって。窓全開なんだから。」

あたしは『戸塚 小夜子』（トツカ サヨコ）

あたしを起こしたのは『長谷川 誠』（ハセガワ セイ）

幼なじみで家が隣で、

オマケにあいつとあたしの部屋の窓は向かい合っていて、

その間は楽々跨いで行ける程の距離。

せーちゃんの自転車でいつも通ってるあたしは、
いっつも彼に起こされている。

怒られながら…ね。

「おつまたせー。」

ようやく用意ができたあたしは、

先に玄関で待つてゐるせーちゃんに声をかける。

「遅い！」

「ごめん、ごめん」

軽く謝りながら、自転車を跨ぐ。

前にいる運転手は、ブツブツ文句を言っていたので、

「遅刻するぞー。」

なんて声をかけると、

慌ててペダルを漕いだ。

あたし達はただの幼なじみ。

どんなに願っても、

あなたがあたしを見てくれない限り、

永遠に結ばれる事のない

あたし達の悲しいカンケイ。

第2作戦（前書き）

… どんどん、予定していた文と変わってきております。

第2作戦

『栄才高等学校』

あたし達が通つてゐる学校。

この辺は昔から人口が少なく、

一学年は約20名くらいで、

毎年一クラスしかない。

その為、ほとんどの生徒が小学校から一緒のメンバーである。

つまり。

ずっと一緒にいたんです。

友達も

ライバルも

大好きな人とも。

「おはよー。」

朝の教室は、挨拶が絶えず聞こえてきて、

適当に返しながら

あたしとせーちゃんは自分の席に座る。

あたしが前で、

せーちゃんが後ろ。

出席番号順の座席は

小学校からこのままだから、

密かに嬉しかったり。

実は私、戸塚 小夜子は
長谷川 誠に恋をしています。

いつからかと言うと

自分でもわからない程昔から。

自覚をしたのは中学2年生、

つまり2年前です。

実はあたしもどうしたらいいのかわからない状態。

あたしにとって、彼は初恋相手で

現在進行形なのです。

そんな事なんて知らない、このアンポンタン王子は

毎日あたしに対して普通に接してくる。

自転車だって毎日ドキドキしているあたしに対して、

あいつはたまにあたしを忘れて先に行く時がある程、

至って普通の出来事にしか思えないらしい。

そんな王子にも少し遅めの春がやって来たらしく。

あたしは冬に逆戻りしそうです。

今は7月中旬。

事が起きたのは、

夏真っ盛りって感じのカラッと晴れた暑い日。

まるで、天気までが彼女を祝福しているかのよう。

みなさん。

転入生がやって来ました。

第3作戦（前書き）

はりきりすぎて、更新の速さに自分でもびっくりです。

ただ未だに二ページ目の作り方が不明の為、少ししか話が進めません。

ご了承くださいます。

第3作戦

いきなりやって来た転入生の第一印象。

「女の子」

その子を見た瞬間、びつくりした。

小柄な身長。

黒髪に腰より少し上くらいの長い髪には、ふんわりウェーブがかかっている。

端正な顔立ちで、

唇は少しぼってりしてて。

まさに、完璧な
「女の子」

平等なんてこの世にはない。

でも、あたしがそんな彼女を気にしたのはビジュアルなんか関係なく、

名前だった。

彼女の名前は『箱井 千夏』

お気付きでしょうか？

彼女の席は、

あたしと

あいつの

間でございます。

あたしとあいつの大切な繋がりの一つが

簡単に消えてしまった。

時を重ねる度に、あたしとあいつの距離は離れて行く。

お願い。

あたしからあいつを離さないで。

あたしはあなたが

怖い。

そんな事なんか、全く気にしないアンポンタン王子は、さっきから彼女と笑いながら話をしている。

「戸塚…小夜子ちゃん？」

え？

びつくりして、慌てて後ろを向く。

「な…何？」

「あつ今日から前と後ろの関係って事でよろしくね！」
ふんわり笑う彼女を、真っ直ぐ見れない。

「さーよ、無視は感じ悪いぞー。」

うつさい、バカ王子。

「『さーよ』？」

「『小夜子』だから『さーよ』！」

あたしの事を、笑顔で話す彼。
胸がきゅゅつとなる。

でもあたしの事なのに、全然入っていけない。

それに…

「なる程！

あたしも『さーよ』って呼んでいい？」

「いいんじゃない？クラスのみんなも『さーよ』って呼んでるし。」

彼女に向ける笑顔。

止めてよ。

同じ顔であたしを見ないで。

でも気付いていなかったのはあたしの方だった。

この時から既に、あいつはゆっくりあたしから離れて違う道へ歩いてた。

格別の笑顔を向ける彼女の方へ。

ゆるゆる。

第3作戦（後書き）

やっぱりこんなに長いのは二ページにするべきですね…

こんなへボ小説でも読んで下さり、感謝の嵐でございます！

第4作戦（前書き）

私情で更新が遅れた上に、文章がおかしいです。

しかし私なりに頑張ったつもりなので、最後まで読んで頂けると幸いです。

第4作戦

「可愛らしい子が来たわよねえ。」

休み時間。

親友の『小松 亜美』と話す話題はやはり転入生についてだった。

「まさに理想って感じ。」

亜美はフンツと鼻を鳴らしながら、あたしに言う。

「…本当。完璧。」

「俺は、さーよの方が好きだよ。」

びつくりして、後ろを向くと

「…基。」

『矢沢 基』（ヤザワ モトキ）だった。
もともと、

あたし、せーちゃん、亜美、そして基の4人はいつも一緒だった。
まあ、今は3人になってしまったけど。

「基、せーちゃんは？」

「あいつなら、例の転入生に校内案内してる。」

ふうん。

「妬かないの。」

「…本当。完璧。」

あたしが、ぼそっと同じ独り言を言つとすかさず亜美が

「大丈夫。誠の好きなタイプじゃないでしょ、あれ。」

亜美さん、口が悪う御座いますな。

ちなみに。

もともと、

あたし、せーちゃん、亜美、そして基の4人はいつも一緒だった。
まあ、今は3人になってしまったけど。

「基、せーちゃんは？」

「あいつなら、例の転入生に校内案内してる。」

ふうん。

「いじけない！」

ピシッと亜美に言われる。

「いじけてないもん。」

「嘘おつしゃい！あんたはね、分かりやすいの。気付いてないのは本人だけ。」

嘘……。

あたし、そんなに分かりやすい？

「さーよ、俺の告白無視？」「基いっつも同じ事しか言っていないから、もう無視する事にしたの。」

「えー！？」

そう言えば。

「先生に呼ばれてた。」

「何て？」

「知らない。」

急いで教室を出ると、笑いながらせーちゃんと千夏ちゃんにばったり会った。

「うわっ！」

「きゃっ！」

ギリギリでお互い避けたものの、

「さーよ！危ないから走るなよ。」

「ごめん…なさい。」

「あつ悪い。俺、こいつに用あるから先教室入ってて。」

「うん。わかった。」

せーちゃんがあたしにそう言つと、千夏ちゃんはあたしにニッコリ笑い、教室に入って行った。

「何、用って。あたし、先生に呼ばれてるんだから。」

「日曜日、俺らの両親いないからさーよ、うちに来る事になってたじゃん。」

「うん。」

「あれ、無理になった。」

「何で!?!」

「千夏にその日、この辺案内する事にしたの。」

夜まで？

あたしを置いて？

「あたし…一人ぼっちじゃん……。」

「うん。だから、基に来て貰ったら？亜美でもいいけど、基さ、さーよの事好きみたいだし前向きに見てやってよ。」

あたしの中で何かが崩れた。

彼が彼女の元に戻り、

あたしが逃げるように職員室に行き、

帰って来るとこんな噂を耳にした。

『長谷川 誠と箱井 千夏は付き合っている』

第5作戦（前書き）

不定期にも程がありますね……

第5作戦

どんなに明るく振る舞っても

やっぱりあなたにはわかるんだね。

なのに。

あなたは肝心な事には気付かないね。

あなたにとってあたしは何ですか？

事の始まりは奴からだった。

「近くに遊園地が出来たから5人で行かない？」

突然のせーちゃんからの誘いだった。

勿論5人とは、

あたし

せーちゃん

亜美

基

千夏ちゃん。

みんながスケジュールを確認している中、

せーちゃんがコッソリ近付いて来て、

「基とお前2人つきりにしてやるから。」

と、あたしにしか聞こえない声で言う。

この人は本気？

その後、同じ事を亜美に言いに行くせーちゃん。

待つて。

亜美には言っちゃダメだよ。

だって、亜美は……

「だからさ、基とさーよを2人つきりにしようぜ。」

亜美はチラリとあたしを見た。

何か言い出そうと言う顔をするが、

「……分かった。」

と小さく言う。

ダメだよ。

亜美は、

基が好きなんだから。

日程は結局、来週の日曜日に行く事になった。

その日を境に、

あたし達はどんどん離れていく。

勿論。

そんな事誰一人として知る筈もなかった。

第5作戦（後書き）

今回もこんな文章を最後まで読んで下さって有難うございました。
次回もお付き合いして下さいと嬉しい限りです。

第6作戦（前書き）

今までで一番長くなってしまいました。

頑張って最後まで読んで下さると嬉しいです！！

第6作戦

あたしさえいなければ？

あたしだって、そんなにバカじゃないよ。

遊園地当日は素晴らしい快晴だった。

千夏ちゃんパワー？

みんなそれなりにお洒落をして来ていた。

せーちゃんと基は着崩した服装。

亜美はふんわりしたバルーンスカート。

千夏ちゃんはミニスカート。

遊園地に来たんでしょ？

あたしと言えば、ジーパンにチュニック。

「さーよ、他になかったの？服。」
基は笑いながら言う。

「……はは。」

何て返せばいいのかわからなく、
苦笑いをする。

そしたら、

「さーよ、そんなんじゃ好きな人も振り向いてくれないよ。」

せーちゃんが真面目な顔をして言う。

あんたが言うのが一番応えるんだって……

バカ…

「さーよ、大丈夫？」

基が声を掛けてくれた。

基はバカじゃないから、
あたしがせーちゃんの事を想っている事は知っている。

勿論、あたしもバカじゃないから、基があたしの事を少し特別な感情を持っているのもわかっている。

気付いていないのは……

仲間ハズレは……

遊園地はあたしにとって酷なものとなった。

せーちゃんと千夏ちゃんが、

あたしが見る限り、2人が目を合わせた回数

22回……

多すぎない？

「せーちゃん。」

さっきも言った通り、あたしはあなた程鈍感じゃない。

分かるんだよ。

あなたの事なんて。

「どうした？」

「うん。ちょっといい？」

みんなには後で合流すると言い、

2人で近くのベンチに座る。

「どうした？」

「聞きたい事があるの。」

「何？改まって。」

「正直に答えてね。」

「うん…？」

「千夏ちゃんの事、

好き？」

あたしの質問に顔を赤くする奴。

もう、分かった。

聞きたくない。

「……そうなのかな」

気付いてないのは、
あんただけだよ。

あんなにも愛おしかった彼に少し苛立つあたし。

最低だ。

「……そうだと思うよ。」

仲間ハズレは

あ
た
し。

第6作戦（後書き）

最後まで読んで下さりありがとうございました！

厚くお礼申し上げます！

第7作戦（前書き）

どうやら10話くらいで終わらない気が…

あまり長くないようにしようとは思っているのですが、
なかなか上手くいかないものです。

第7作戦

あたしの好きな人は

あたしではない人を好きでした。

あなたならどうする？

あたしは当分動けません。

『失恋したら新しい恋を探す』

なんてよく言うけど

簡単には忘れられないよ。

せめてあなたに想いを伝える程の勇気があれば……

「誠がそんな風に言ったの？」

今にもじめつとした空気が漂う今日、

教室にいたくなかったあたしは、亜美を連れて屋上の階段に座る。

ここは稀に人が来るくらいで、
今はあたし達だけだ。

「本当に千夏ちゃんが好きって言ったの!？」

亜美がもう言葉を付け足し、同じ事を聞いてくる。

今は、昨日行った遊園地での出来事を亜美に報告中。

勿論、せーちゃんの事です。

「はつきり好きとは言っていないけど、そんな感じ。」

「あちゃー。あの鈍感が気付くくらいなんだから……」

亜美は思い出したように口を手で抑えた。

「……相当好きなんだろ……。」

亜美の代わりにあたしが言葉を付け足す。

自分で言う事でかなりのダメージを受けたあたし。

だって悔しいの。

「…一番好きなのはあたしなのに……。」

「え？」

「一番長くいるのもあたしだし、あいつの宿題やってあげたのもあたしだし、おばさんがいなかった時あいつの世話をしたのもあたしだし、あいつがおばさんに怒られる時一緒に謝ってあげたのもあたしだし、」

言ってる間に涙が次から次へと溢れ出す。

「さーよ……。」「

「学校一緒にいつも行ってるし…休日買い物と一緒に行ってたし…クリスマスも誕生日もずっと一緒だったのに……。」

これからせーちゃんの隣にいるのは、あたしじゃない。

それがこんなにも悔しいんだ。

普通のカップルなんか比べ物にならない程、
あなたへの想いはこんなにも溢れているのに、

あなたは見てくれもしない……。

「あたしは誰よりもせーちゃんが好きなの……。」

泣いた後だから、辛うじて小さな声でしか言えない。

それでも亜美はちゃんと聞こえたのか、
黙って背中をさすってくれる。

そんな時。

『ガタン』

ドアの向こうから音がした。

あたし達は、びっくりして慌ててドアを開くと、

千夏ちゃんが一人突っ立っていた。

そう、屋上の階段には

稀に人が来る。

第7作戦（後書き）

ここまで読んで下さった方全ての人に感謝の嵐です。

もうしばらく付き合って頂けると幸いです。

第8作戦（前書き）

やっとここまで来ました。

段々、誠が憎たらしく思えてきました……。。

第8作戦

「…千夏ちゃん。」

こっちも驚いているが、あっちはもっと驚いていた。

「ご、ごめんね！盗み聞きするつもりなんてなかったんだけど、さーよが泣いてたから入りにくくて……。」

ドクン

「どこから聞いてたの？」

お願い。

あなたには気付いて欲しくない……。

あたしの気持ちをわかって欲しいのは……

「さーよが…誠の事好きって……」

時が止まった気がした。

一生懸命千夏ちゃんが弁解していた気がするが、

亜美が隣で千夏ちゃんを責めていた気がしたが、

全くあたしには聞こえてなくて。

あたしが現実に戻されたのは、

大分経ってから、千夏ちゃんが言った言葉だった。

「あたし、誠とは付き合わないから。」

ニッコリあたしに笑う。

でもね、分かるよ。

千夏ちゃんの目には涙が溜まっていた。

あたしの幸せは何だろう。

ドラマのようには

『好きな人さえ、幸せなら。』

なんて言えない。

言えないのに、

「そんな事しないで。」

口が勝手に喋るの。

「千夏ちゃんは、せーちゃんの事が好きなんでしょう？なら、あたしに気を使わないで。」

せーちゃんもきつと千夏ちゃんの事が好きだよ。」

せーちゃんが、

またあたしから一歩離れる。

せーちゃんなんか好きになるんじゃないかなかった。

大っ嫌い。

でも、

それ以上に好きです。

第8作戦（後書き）

こんな文章を最後まで見て頂いた全ての方に、

感謝の嵐でございます。

本当にありがとうございます。

第9作戦（前書き）

みなさん、こんな小説でもいよいよ次で10話です。

次の話は重くなりそうなので、今回は軽めでございます。

何卒、最後までお付き合い願います！

第9作戦

あたしは、嘘の仮面を被るのが上手い。

それもあなたのせい。

「いいの？さーよ。」

千夏ちゃんがいなくなっ
てから、
亜美が静かに言う。

「…うん。」

だって。

他にどう言えばいいの。
あたしが教えて欲しいよ。

教室に戻ると、

鈍感野郎と千夏ちゃんが楽しくお喋りをしていた。

突然、心臓を鷲掴みにされた気分だ。

手をギュッと握ると、爪が手のひらに食い込む。

でも、

痛いのは手なんがじゃないんだ。

千夏ちゃんは、あたしに気付くとせーちゃんからさっさと離れた。

千夏ちゃんは、まだ女の子の友達がいらない為一人自分の席で俯いている。

止めてよ。

まるであたしが悪者じゃん。

せーちゃんが首を傾げながら、こっちに歩いてくる。

「あつ、さーよ。」

『あつ』って何よ。

「お前に言いたい事があつたんだ。」

「何？」

「今年の文化祭、一緒に回れないから。」

「何で!？」

「…千夏誘おうと思って。」

また……。

そんな顔、赤くしないでよ。

もう、十分わかってるから。

「…わかった。」

あなたは、あたしが一人でも気にしないんだね。

もう呆れて、涙も出ないよ。

誰よりも好きなのに、想いが届かない。

恋なんて楽しくない。

そろそろ、夏休み。

の前にある文化祭。

毎年、あなたといたイベント。

またあなたから離れて行くね。

第10作戦（前書き）

重くなるとか言いながら、目標までいきませんでした…

第10作戦

当たり前だった事が今になって、

こんなにも愛おしい。

『振り向いて』なんて言わないから、

置いていかないで。

文化祭当日。

あたしは、当番をみんなより多くしてもらった。

忙しさで、あんなやつの事忘れるだろうなんて思ったけど、そんな甘くはなくて。

お客がいなくなった時、ふと思ってしまう。

『いつもの今頃は、あなたというのに。』

と。

「さーよ!」

声を掛けられ、後ろを向くと墓がいた。

「今日ずっと休みなしだろ?そろそろ休みにしない?」

「……そうだね。」

でもやっぱり運命は変わらないみたい。

あたし達の反対側から、良く知っている人が歩いてくる。

一番会いたくなくて、会いたい人。

「千夏ちゃん…」

…せーちゃん。」

千夏ちゃんは、ハツとしたようにせーちゃんから離れる。

大丈夫。

笑え。

「お二人さんデート中？お似合いですねえ。」

笑え！

せーちゃんは顔を赤くしてあたしに

「ばか！」とか言う。

「じゃあ、あたしも基とデート中だから！…じゃあ。」

強がりなんて慣れてる筈なのに。

涙が出そうになって、基の袖を掴み回れ右をして走った。途中人が振り返った人もいたけどあたしはそれ所じゃない…

「…さーよ！」

かなり走った後、基に呼ばれハッとした。気がつくと生徒のいない

裏庭まで来ていた。

「あ…ごめん。」

誰もいない。

せーちゃんも千夏ちゃんもいない。

「さーよ、大丈夫？」

「大丈夫だよ。」

あたしはそんなに弱くない。

「こんな時に言う事じゃないけどさ…」

「…何？」

「俺、さーよの事好きなんだ。」

「あのさ、千夏。話があるんだけど…」

「…何、改まって。変な誠。どうしたの？」

「俺、

千夏が好きなんだ。」

静かな空気が流れる。

「さーよが誠の事を好きなのは知ってる。何度も諦めようとしたんだけど、

やっぱり無理だった。」

「…基。」

「さーよ、返事が欲しい。」

あたしは、

弱くない。

でも、それはせーちゃんがいたから。

今のあたしは、

本当に強い？

第10作戦（後書き）

今回もこんなへボ小説を読んで下さり有り難う御座います。全ての方に感謝です！！
有り難う御座いました。

第11作戦（前書き）

いよいよここまでできました。

皆様、ここまでお付き合いして頂き本当に感謝をしています。
そしてもう少しお付き合い願いたい限りでございます。

第11作戦

心臓が高鳴っている。

痛いくらい。

周りは静かすぎて、今にもあたしの心臓の音が聞こえそう。

苦しい。

息ができない。

「あ…あたしは…。」

前ならはつきり言えた。

『せーちゃんが好き。』

でも、今のあたしじゃ言えない。

言ったらあなたが傷つくでしょう？

なんて、かつこいい事言えない。

ただ、

誰かに寄りかけたい。

あたしの為。

最低だなんてわかってるけど、多分誰もこの複雑な気持ちはわからない。

わかって欲しくもない。

この空虚感。

涙でもない。

あなたじゃないけど、

「…時間かかってもいいなら…。」

あなたでもいい。

「……ちーよ……」

嘘つくなよ。」

「え？」

「お前、誠の事好きじゃん。」

なら何であたしに告白するのよ。

こんなあたしに。

「俺はお前と付き合いたい訳じゃないんだ。否、出来れば嬉しいけどさ。お前、俺と一緒にいたって笑えないだろ？うーん…何だろ。上手く言えないけどさ、俺はお前が幸せならそれでいいんだ。」

お前が幸せなら、それでいいんだ。

格好いいね、基。

あたしもこの前までそう思ってた。
でも、今気付いた。
あれは本心じゃない。

あたしは誠が好き。

この気持ちを言いたい。

基はニッコリ笑い、あたしの背中をポンと叩くとあたしを置いて、
みんなの元に行ってしまった。

無性に泣きたくなった。

アイツにはあたしの気持ちが分かってた。

そんなアイツにあたしはすがりついた。

自分が恥ずかしい。

出ないと思っていた涙が溢れ出す。

「基、ごめんなさい。」

それから、

ありがとう。

「言わなくちゃ。気持ちを。」

鈍感王子に。

第12作戦（前書き）

中途半端！！！！

… 大変申し訳ありません。

第12作戦

思えば、いつつも私はあなたの後ばかりを追いかけていた。
この高校だってあなたがいるから受けたんだよ。

離れるのが怖くて。

今の関係が愛おしくて。

あなたの背中ばかりを見てここまで来たの。

これからあたしは、あなたに大切な事を伝えるけど、
かなり私にしては、勇気を出してる方なの。

受け止めてね。

「寒。。。」

夕方は、肌寒い。

廊下の窓から、冷たい空気があたしの肌を包む。

夕焼けの赤い光が、全ての教室を照らしていて
生徒のいない廊下は、

いつもの学校の気がしなくて。

一層あたしの緊張を煽る。

クラスの前に立つと、中に一人男の子がいた。
間違える訳がない。

愛しい背中。

私の道しるべだった。

足が震える。

胸が痛い。

上手く呼吸が出来ない。

怖い！

一人では進めない。

駄目だ。

やっぱりあたしは、

弱虫だ……。

「さーよ？」

え？

「そんな所で何してんの？」

せーちゃんがあたしに気付いた。

お願い。

こっちに來ないで。

まだ……

まだ駄目なのに……

「……おいで。」

せーちゃんがあたしに笑いかけ、手を差し出す。

あたしは黙って手を取る。

ああ、この手だ。

昔からあたしを救ってくれた手。

温かい……。

この手にすがりつきたい。

力一杯抱きしめて欲しい。

あたしが気持ちを伝えた瞬間に、今まで笑いあえた事がきつと出来なくなるね。

それでも言いたい。

そうあなたを見て思った。

「……せーちゃん。」

「……ん？」

「
…好き。
」

「
…え？
」

沈黙が怖い。

二文字の言葉が重い。

でも、今逃げたら一生あなたと話せない気がするから。

「…実はさっき俺も別の人に告白したんだ。」

「…千夏ちゃん？」

「…うん。」

せーちゃんが千夏ちゃんに告白……。

皮肉にも臆病者のあたし達は告白まで一緒なんて。

神様も残酷だよね。

「…ごめん。」

せーちゃんがボソつと言う。

「それは気付かなかった事に対して？それとも…あたしの告白に対して？」

「…えつと…。」

「…そっか。」

「え？」

分かってるよ。

もういいよ。

「じゃあ…。」

やっぱりあたしは臆病者みたい。

あなたに背を向けて走って教室のドアに向かって走る。

「さーよー！」

あたしは大声で呼ばれても振り返る事は出来なかった。

涙が止まらない。

止めてくれる人もいない。

あなたが良い。

第13作戦（前書き）

上手くまとまれば、次が最終話となります。

ここまでお付き合い本当にありがとうございます。

皆さんの望み通りの進み方ではないかもしれませんが、こういう話の進み方もあると言う事が少しでも伝わればいいなと思っています。

第13作戦

走りつづけた。

涙なんか拭ってられない。

呼吸が出来ないくらい全力疾走して。

でもやっぱりあなたには叶わないね。

「待つて、さーよ!」

あたしは腕を掴まれた瞬間、その場に崩れ落ちた。

もう走れないからじゃない。

もう駄目だと思ったの。

多少なりともさっきの空気のまんまなら、明日から普通に接して何事もなかったように出来る。

でもこうしてキチンとふられたらあたしはどうすればいいの？

「…お願い、さーよ。ちゃんと聞いて。」

あたしは出来る限り首を横に振る。

頭が痛い。

「頼むから…聞いて。」

せーちゃんが弱々しくあたしに言う。

「俺自身も自分の事がわかんないんだ。」

自分でもまだ気持ちの整理がついてないし。

正直さーよの事はそんな風に意識した事はなかった。」

駄目。

それ以上言われると涙が溢れてしまう。

「千夏にふられた瞬間、やっぱり落ち込んだよ。この世から消えてしまいたいくらい。」

…でもさ、こんな俺でも立ち直れたのはさーよのお陰なんだよ。」

え？

「さーよがこの教室に来た時、丁度さーよの事考えてたんだ。」

「…え？」

「無性にさーよに会いたくなって。さーよが来た時はびっくりした。」

駄目。

溢れる……。

「だからまだわかんないけど、この先俺の傍にいて欲しいのはもしかしたら……」

『さーよなのかも。』

涙が止まらない。

せーちゃんが優しく背中を叩いてくれる。

誰もいない教室で、

私とあなたの顔は夕暮れ色に染まる。

第13作戦（後書き）

次がラストとなります。

宜しければこんな小説でも最後までお付き合い頂きたい限りでございます。

最終話（前書き）

いよいよ最終話です。

今までお付き合い下さりありがとうございます。

未熟者故に上手くまとまらなかったのですが、頑張って書いたつもりなので、最後まで読んで下さると嬉しい限りです。

最終話

翌朝。

あたしは真つ先に屋上に行った。

昨日メールで呼び出した相手は既にいた。

「待たせてごめんね、千夏ちゃん。」

千夏ちゃんは風に髪を靡かせながら、くるりと振り返る。

「大丈夫だよ。私も今来た所。」

謝らないで。

と千夏ちゃんはあたしに言う。

「…誠の事だね。」

千夏ちゃんは静かに言う。

あたしは少し躊躇ったが、静かに首を縦に振る。

「千夏ちゃん、せーちゃんの事好きだったんだよね？」

「……。」

「…何で？」

「…あたしの為？」

「…それもある。でもそれだけじゃないよ。」

千夏ちゃんはそれから一言も喋らなかった。

その後チャイムが鳴ってしまい、あたし達は教室に戻る。

いつもと何の変わりもない。

みんなの挨拶が行き交う中、ぎこちないのはあたし達5人。

教室に入れば一番に彼を探す。

見つけた瞬間走り出したい気持ちになるけれど、そこは我慢。

「…おはよ。」

小さな声でいつも通りに挨拶が出来ない。

それでもあなたはいつもの通り、優しく

「おはよ。」

と言う。

昨日の事がまるで嘘のよう。

不安になったけど、せーちゃんと千夏ちゃんがぎこちなく挨拶するのを見て不安はかき消される。

胸がモヤモヤしている。

これで良いのかな。

こんなに休み時間になって欲しくない日は今までにないくらい、あたしは緊張していた。

休み時間になると、ゆっくり亜美がやって来た。

「屋上に行こっか。」

亜美の言葉に黙って頷く。

本日2度目の屋上。

風は収まっていた。

亜美には、せーちゃんの事も千夏ちゃんの事も言った。

もちろん基の事も。

「あたしね、基に告白する。」

「え!？」

亜美の言葉に驚いて、変な声が出た。

「ちよつと、変な声出さないでよ。今すぐじゃないよ。」

「…あつ、そうなんだ。」

「私、さーよから少し勇気もらった。だから頑張ろうって思えたの。これからは、あたしが頑張るから見てて。」

そう亜美は、あたしにしつかり約束をした。

亜美はもう一人でも平気なんだね。

あたし達だつてずっと一緒にいられる訳じゃない。

あたしだって人の心配なんかしてる暇なんかないんだ。

「ねえ、さーよ。」

「なあに?」

「幸せになろうね。」

その時亜美が見せた顔は、

あたし一生忘れないよ。

あたし達は、随分遠回りした恋だったけど。

幸せになれるよね。

それから半年後の卒業式。

私達が今どうなったのかはまた別のお話。

あえて言うなら、千夏ちゃんはとびつきり素敵な彼氏が出来ました。

最終話（後書き）

前書きにも書きましたが、本当に長い間お付き合いありがとうございます。

最後は納得いかない方も多いのではないのでしょうか。

私自身もまだ終わった感じがしないくらいですし、何より誠と小夜子のその後を書き忘れました。

なので、続編を一つくらい作ろうかなと思うのですがこのまま余韻を残した方がいいのでしょうか。

是非皆様の感想お聞かせください。

今回は長い間お付き合い頂き本当にありがとうございます。
次回もまた皆様に会える事を祈って。

蒼咲 秀

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7415b/>

鈍感王子

2010年10月10日06時45分発行